

Title	W. A. Camps, An introduction to Homer
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.227- 233
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0227">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0227</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

W. A. Camps;

*An Introduction to Homer.* Pp XIV + 108.

Clarendon Press, Oxford 1980.

真下 英信

東洋に汗牛充棟という言葉がある。古典ギリシアの世界を思うに、この語はホメーロスに関する研究書に最も相応しいのではなからうか。多少ともホメーロスに関心を持つ人は、まず注釈書をとよりに逐一綿密にテキストを読み始めながら入門書的な本を編いて行くのが常道であろう。こうした時の優れた入門書として種々な本があるが、まず A. J. B. Wace; F. H. Stubbings の *Companion to Homer* (1962), G. S. Kirk の *The Songs of Homer* (1962), それから A. Lesky の *Homerus* (RE. Suppl. vol. XI, 687ff), 学説史的に重要な論文を集めた J. Latacz 編集の *Homer* (1979) 又歴史的な面については D. L. Page の *History and the Homeric Iliad* (1959) や T. B. L. Webster の *From Mycenaean to Homer* (1958) などが挙げられよう。しかし、これらの本も精読するにはかなりの専門的な予備知識を要求される。上述の Wace; Stubbings の第四章 “The Language of Homer” (by L. R. Palmer) などその最たる例である。

ところで、ホメーロスの作品は一般に原典よりむしろ翻訳でより多くの人々に親しまれている。ここに紹介する Camps の本は、こうした実情を踏まえてホメーロス研究の専門家や古典学者よりも翻訳でホメーロスを読む素人の為に書かれた。作者の目的は、ホメーロスの作品はなぜ訳で読んでも面白いのか、しかし同時に、翻訳するとどれ程原作の面白味が損われてしまうかを明らかにしようとするものである。本書の構成は二部からなる。第一部は、ホメーロスの詩の特徴を種々な面から論じているもので、僅か六十四頁であるが内容は極めて豊富である。第二部は補注である。Camps は第一部が中心であると述べているが、評者は第一部に劣らず補注の部分に興味を引かれた。

なお、著者は一九一〇年生れ、Pembroke College, Cambridge の出身で、一九七〇年より同 College の Master である。著書としては Propertius の校訂本や本書の対とも言える *An Introduction to Virgil's Aeneid* (1969) が代表的である。

次に各章順に本書の内容を簡単に紹介しよう。

### Preliminary

ホメーロスとは誰れか、いつごろでイーリアスやオデュッセイアーを著わしたか、所謂ホメーロス問題については一言、不明と簡単に片付けている。しかし、鉄器の使用がしばしば言及されている故、初期鉄器時代の後に両作品が作られたのは明らかとしている。

製作年代は、イーリアスが前八世紀末、オデュッセイアーが少し遅れたとする説が有力と補注で述べている。その他補注で Camps は鉄器の使用例を示したり、青銅がしばしば定形句に見られる理由を述べたりして読者により深い関心を抱かせるのに成功している。なお、口承叙事詩の常として歌われている事件は誇張されて行く傾向にあるので、作品に歌われている戦争はそのまま史実ではないが、トロイ戦争は実在したとしている (cf. M. I. Finley "The Trojan War" JHS (1964))。

### Similarities and differences between *Iliad* and *Odyssey*

両詩は言語、文体、表現方法等で類似点を持つが、相異点もある。イーリアスの構想はより単純で集約的であるのに対して、オデュッセイアーのそれはより巧妙かつ有機的に結合されており視野も遙かに広い。イーリアスはトロイ戦争を前向きに見ているが、オデュッセイアーは回顧的に見ている。その外、登場人物、場面の差、さらに叙述の対称性、時間の使い方など種々な視点から両詩が比較検討されている。なお、両詩が一人の手になったか否かについては決手が無いとしている。

### The world of the poems

両詩に叙述されている世界は数世代に渡って伝えられた物語を基にしている為に、特定の時代に限定出来ない。こうした考えは Snodgrass ("An Historical Homeric Society?" JHS

XCIV (1974) p. 114~125) と同じく M. I. Finley ("The World of *Odyssey* revisited" Proceedings of the Classical Association LXXI (1974) p. 13~31) 説と対立するものと言えよう。Camps はこの考えに立脚して両詩に歌われている王、貴族、平民、職人、隷属民等を論じた後に、その政治、社会機構から結婚、お祭りなど日常生活に至るまで逐一論じている。

### The supernatural

両詩を通じて到る所で神業が行使されており、神々と話したりする英雄達はその力や光輝さで神々の同等者のように見える。

### The story of the *Iliad* in outline The story of the *Odyssey* in outline

内容は言うまでもないので省略する。ところで、オデュッセイアーの終りを何所にするか古来問題になっている。この点、Camps はアリストパネスやアリストタルコスがオデュッセイアーの XXIII 卷二九六行をもって *ἔπειτα* 又は *τότε* とした意味は不明とし、種々な解釈があるが、二九六行以後の詩句に *cont-raction* や *synizesis* が異常に多いのは注目に価すると述べている。

### Omissions from the outlines

ホメーロスの作品を要約して語ると何が欠けてしまうかを論じている。一頁にも満たない章であるが、要約から脱落した点に逆

に両作品の特徴を見ているのは極めて示唆的と言える。物語を要約すると欠けてしまう神々の世界、人間の責任問題など四つの場合に分け四頁(ノ)にも渡り補注で論じられているのも非常に面白い。

### Unity of design

これも半頁に満たぬ章である。両作品とも良く指摘される点ではあるが、舞台を僅か数週間に焦点を絞り、時間的にもしっかりと注意深く構成され一つのまとまりが与えられている。加えて、主題は共に極めて人間的なものを中心としている。すなわち、一方は恐るべき結果を生むことになる、秀でた本性を持った人間の一時的な怒り、他方は、互いの忍耐と英智により、長い離別と苦しみの後の夫と妻のやっとの再会を中心においている。

### Imperfections of detail and their causes

両作品各々、一人の創造的な才能を持った人間が作詩にかかわっている (cf. J. Griffin. "The epic cycle and the uniqueness of Homer" JHS 1977)。しかし、これらの叙事詩の背後には、言語、作詩法、物語その他種々に渡り長い伝統があった。従って、これらの作品をどこまで作者(又は作者達)が創作したのか、どこまで先人の作品を取入れているのか不明である。作詩技法について言えば、イーリアスやオデュッセイアが作られた時、文字が知られていた事は確実であるが、作詩に文字は役立たず、もっぱら記憶により作詩された。その後のテキスト

の伝承過程も不詳である。特に、最後に作詩されてから紀元前六世紀に至る間の事情は全く不明である (cf. 久保正彰、口誦叙事詩の文字伝承とは何か、「思想」1976. XI.)。しかし、原作に対して多くの手直しが生じたのは確かである。こうした例として、Camps はイーリアスの「船のカタログ」やオデュッセイアの「Nekyia」等を指摘する。従って、作品に矛盾や不整合が生じていても不思議でないし、かつ生じた経緯を推測するのも難しくはない。

確かに両詩ともども挿入、彫琢の不完全な所がある。しかし、我々がホメーロスを読む時、These facts have to be recognized and accepted, as they have been by appreciative readers for centuries past. They encourage the questing intellect to all manner of speculations. But the pursuit of these speculations, proper in itself and not wholly unfruitful, can lead away from the enjoyment of the excellence which both poems exhibit, in spite of all imperfections, in the versions which we have. (p. 17)

ここに、本書を著わした Camps の意図の一つが明示されている。同時に、二千年以上に渡る古典研究を振り返ると言うとき少し大げさになるが、少なくとも十九世紀よりの古典研究を思い出しながらこうした文章を読むと、K. Lachman や M. Parry の名前が頭脳をかすめてくる中で、後者の業績の偉大さに改めて驚嘆する。

### How the stories are told

すでに、アリストテレス（詩学 XXIV 1460a）が指摘して通り、ホメーロスの作品はドラマ的構成を持ち、直接話法が非常に多く用いられている。この技法は物語を生々しく描写するのにすこぶる効果的である。その理由として Camps は三点を挙げている。

① 物語の動きと、それにからまる人間の行為の二つがあやなすさまが描かれ、あらゆる出来事がそれに反応する人の感情と思想を引出している。

② ヘレンの美貌とかメネオオスの宮殿の豪華さとか特異な印象が第三者の口を借りて語られる為に、我々にとっても現実性が生れてくる。

③ 子供を慰さめる母親の態度、或いは愛情こまやかな父親と会話する娘の態度等我々読者が詩人と共有出来る人間行為の経験を、詩人が人生の永遠の真実として表現する才能を持っていた。

事実、我々の経験ですなおに詩の世界に入って行ける描写や場面が非常に多い。驚きに泣き叫ぶ赤子、床を歩く人の足音、二十年振りに友を認めて尾を振る老犬。これら、時には些細とも思われる場面を我々は一瞬の躊躇いもなく詩人と共有出来る。ここに二千年以上の歳月を越えて、我々が物語に即座にとけ込める秘密がある。そして、Camps は補注で、例えばオデュッセイアー五卷の三二二〜三の如き情感に満ちた詩句が物語の場面の変る所で

多く現われる事実を指摘したり、笑い声や音が如何に使用されているかざりと述べている。こうした例からみても、本書の補注が極めて面白く、綿密に読まねばならないことが解る。

### Characterization

詩に登場する人物達は、物語を構成して行く種々な事件と同様現実性を帯びている。詩人は、我々が日常生活で人を見るのと同方法で持って登場人物を描写していく。すなわち、人の勇氣、正直さ、道徳的氣質、寡黙か多弁か、身長、髪の色等の身体的特徴、その他か、これまで人が背負って来た経験、職業など述べていく。しかし、物語の性格描写はかならずしも性格自体の研究ではなく、むしろ多々ある性格の確認にある。

ところで、我々が性格を知るには四つの場合がある。まずは、所与の事態での人間の慣習的行動、第二は、永続的印象を与える特別な場合、次に、他人に遍く知られている反応や評価、そして最後に肉体的生物学的な著るしい特質。両詩の作者はこうした視点に立ち性格を描写している。加えて、種々の型の人々があり、読者にも親しみを持てる人々が多く登場するので、場面が俄に現実性を帯びて来る。Camps はイーリアス、オデュッセイアーに登場する人物を具体的に例を挙げながら――例えば、アキレウスとオデュッセウス、アンティノオスとエウリュマコス―その性格描写の方法を説明している。

## Illustrative examples in translation

本章では、これまで述べて来た点、特に物語の叙述と会話の構成のされ方や、時には余りにも些細と見える描写がいかに現実味をおびているかなど具体的に例を挙げながら寸評している。引用されている所はイーリアス VI. 392~502; VIII. 553~565; X VIII. 369~427; オデュッセイアー I. 425~444; XVII. 260~334である。

## The poetic medium

前章まで読めば、読者はホメーロスの作品のどんな所が、どうして面白いから深く理解出来ると思う。Camps はさらにこの最終章で作詩技法の分析に進んで行く。Greekless にホメーロスの韻律、言語、文体を説明して、訳では味わえないホメーロスの一面を理解させようと試みる。非常に良く書かれている章だが、やはりギリシア語を知らぬ人には一番難解な所であろう。けれども Greekless Greek をやっている素人には極めて有益な章である。なお、caesura の説明など欠ける点もあるのは本書の性質上いたしかたなからう。

この章で論じられている内容は次の七点である。

### (i) Verse-form

Hexameter の基本を述べながら、英詩との相違、ギリシア語の母音の重要性などが指摘される。

### (ii) Poetic diction

ホメーロスの詩語は、日常語と異なり種々な方言が入り交り、しかもその方言は地理的・時間的位相が全く無視されている。

### (iii) Word-length and word-sound

非常に語彙が豊富である。例えば、槍を示す語は五個、音を意味する語は五十種程に及んでいる。音も母音、子音、帯気音を縦横に駆使し、同音、同形、母音や子音の重複、alliteration、語の繰返し等幾多の技巧が示されている。

### (iv) Simplicity and lucidity

表現、文体は明晰かつ簡明である。「青ざめた恐怖」などは希な例である。よって我々にも理解しやすいことが例示されている。

### (v) Conventional epithets

ホメーロスを読むとまず第一に誰れでも気付く一大特徴は、日本の枕詞と似た決まった語句の繰返しが非常に多い事だ。この epithet はイーリアスやオデュッセイアーが成立した時に既に古来からの伝統的手法となっていた。epithet は即興的に詩を作る為に必要であった。

### (vi) Recurrent lines and phrases

繰返しは epithet のみでなく、数語よりなる語句、時には数行よりなる句にもしばしば認められる。語句の繰返しは前述の epithet と似た点もあるが、それより遙かに広範囲に使用されている。イーリアスが約一万六千行、オデュッセイアーが約一万二千行、計二万八千行の内、約二千行が二度以上用いられている。この繰返しにより全体の五分の一程にあたる五千五百行が歌われ

ている。繰返しの語句は大別すると四つの型に分けられる。

①イーリアス二巻の冒頭で、アガメムノンが凶夢を目覚めてから長老達に話すように、他の話者の言葉を第三者に語る場合。

②“黒い船”とか *noun-epithet* と結合したものの繰返し。

③会話の導入或いは結論部分での繰返し。すると彼に向って……翼ある言葉を述べた。(Od. I. 12)などは五十回以上使用されている。

④一行から数行に及ぶもので、事件やしばしば繰返される事象、日没とか戦士の倒れる有様を述べたもの。

こうした繰返しが叙事詩でどの様な意味を持っているか。色々と考えられるが、一つには、人間生活そのものが繰返される部分とそうでない部分より成り立っていると考えれば、繰返しの要素と一回的な要素の二つが混在しているホメーロスの詩自体がまさに人生のあやなす織物に対応していると言える。

ところで、こうした繰返される語句の研究は、周知の如く、今世紀三十年代 M. Parry により徹底的に研究され今日のホメーロス研究に多大な影響を与えているが、彼の論文集が最近出版されたので (A. Parry (ed.) *The Making of Homeric Verse* Oxford. 1971) 我々も容易に読めるようになった。

(vii) Resources of poetic emphasis

以上詩の外的側面を論じて来たが、本節では内的側面が検討される詩の世界を芳潤にする為にリズムや音の響き、直喩、隠喩が如何に使用されているか具体的な例を示しながら論じている。

まず、リズムについては *dactylos*, *spondee* の相違が何を表

現するか、又音の響を考えた場合帯気音や母音の連続が何を意味するか等議論は多岐にわたっている。レトリックも多く使用され後世にみられる典型はホメーロスに既に試みられていることが多く例示されている。

隠喩は常に単純かつ用例は少なく、大体定形句に限定されている。ホメーロスの特許品とも言える有名な“翼を持った言葉……”或いは“戦の堤”のように中には意味不明のものも多々ある。

他方、直喩は頻繁に使用されており、短く単純なものと、ホメーロスに典型的な、物語の筋とは全く関係のない次元にまで拡大されたものと二つのタイプがある。後者はホメーロスの手法の顕著な構成要素として早くより用いられたのである (cf. D. J. N. Lee *The Similes of Iliad and Odyssey Compared* 1964; W. C. Scott *The Oral Nature of the Homeric Simile* 1974)。量的にはイーリアスが多く、二百例だが、オデュッセイアは四十例程である。この直喩使用頻度の差は各々の詩の内容に起因している。

ここで、*Camps* は直喩の典型的用例を三つに分類している。

①直接描写出来ない心の内なる状態や感情を示す。

②視覚的に個々の物、行動、経過の特質を表現する。

③物の多量さ、集団描写の効果を出すため。

これら各項目別に具体的な例を挙げながら説明している。又古くより問題にされている比喩と比喻される物の関係についても (cf. H. Fränkel *Die homerischen Gleichnisse* 1921) 同様に論じている。

## Conclusion

結論で Camps はオデュッセイアー XXI. 392~430、イーリアス XXII. 437~472 を引用しながらホメーロスの特徴を総括している。なお Appendix I, II で両詩の構成並びに地誌について簡単ながら面白い指摘がなされているが、関心ある読者は原文を読みたい。

以上、簡単に内容を紹介して来た。本書はその性質上特別新しい見解、解釈は示されていない。しかし、種々な問題を要領良く簡潔にまとめ極めて穏当な説が展開されているのは誠にイギリスの人の本らしく、本書の大きな特徴となっている。補注を含めて百頁そこそこの小冊子ではあるが、これから翻訳でホメーロスを讀もうと思う人にも、何度か原典を讀んだ人にもぜひ一度讀まれることを薦めたい。評者の職業から、高校生にも讀めるよう原文の持っている明晰さと簡潔さを失なわない日本語にどなたか識者が訳されることを期待したい。最後に、強いて本書に不平を言えれば、索引がないのが残念である。せめて本文に引用されている箇所索引だけでも付けて欲しかった。(80. VII. 14)

## 『中根雪江先生』

高 木 不 二

この書は、幕末・維新时期列侯の一人として中央政界で活躍した

批評と紹介

松平春嶽の側近にあって常にその手足となって働いた福井藩士であり、同時に『昨夢紀事』『再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』など維新史研究の上で第一等の史料と目される著述を残した修史家としても有名な、中根雪江の百年忌を期して一九七七年十月に編さんされたものである。従ってやや時宜を失した感はあるが、他に類書をみず、又一般には入手しがたいものでもあるのでここで敢えてその内容を紹介し、あわせていくつか気付いたところを述べておきたい。

本書の内容は全体としては

### 序言

### 一、図版

### 二、伝記

### 三、資料

### 四、図版解説

### 附録

### 系譜

### 年譜

という形になっているが、ここではその中心をなす伝記及び資料について触れておくこととする。

まず伴五十嗣郎氏の執筆になる伝記についてみると次のような構成をとっている。

### 第一章 中根雪江の生立と学問・思想

### 第一節 中根雪江の生立

### 第二節 中根雪江の学問